

●小島なお短歌研究会入賞作品

【1席】

9 1番 前に行く軽トラのナンバー三一五刺繍糸ならうすみどり色

近藤順子

見るともなく見てしまう車のナンバープレート。きつと手芸の好きな作者なのでしょう。「三一五」という数字から、刺繍糸の色番号を連想した飛躍の自在さ。「うすみどり色」が芽吹きのように柔らかくやさしく一首を彩ります。

【2席】

5 4番 海臨む特室ほめてあした眼の手術する人置きて帰りぬ

原田雅子

「特室」は病院の特別室のことと読みました。海の見える部屋に入院する人を見舞う一場面。眼を病むその人には窓ごしの海が作者ほどには見えないのかもしれないかもしれません。「ほめて」のち「置きて帰りぬ」に至る内面の機微を思います。

【3席】

6 6番 昨今の事情にはじまり閉店とお礼の言葉が理髪店のドアに

村本瑛智香

地元で長く愛されていた理髪店だったのでしよう。ドアに貼られた閉店のお知らせには、丁寧な文章でこれまでの経緯や感謝が述べられていた。何年あるいは何十年に渡る人と人との歳月が、簡潔な一首の余白に滲みます。

1 1番 「好きだろう」竹筒ぼうの熱爛をそそぎ去りたり竹の香残し

正木富子

1 6番 着ては脱ぎ脱いでは着して姿見に明日をたしかむ春の瀬祭

木村桂子

6 5番 十五夜を仰ぐベランダ逝く時に手をつなぎし祖母手放しし母

好本幸恵

8 1番 点滴の針を刺せる場所もうなくて窓に張り付くヤモリ見ている

石井久美子

9 7番 真っ裸わたしを洗ふヘルパーさん三人めかも腹ふくらみて

片原政子

1 0 7番 工場の自販機の声「頑張って気を抜かないでご安全に」

福森トミヨ

1 2 6番 真二つに切られて並ぶ白菜に陽の射しくれば黄に炎だつ

藤伊花子